

笹沼澄子 伊藤元信 綿森淑子 福迫陽子 物井寿子 著

「失語症の言語治療」

付．鑑別診断検査・治療絵カード

京都大学講師 浜 中 淑 彦

本書は東京都老人総合研究所言語聴覚研究室の笹沼澄子氏を中心とする治療グループが最近数年間の治療経験の報告をもかねて、成人失語症患者の言語訓練の原理と実際を論じたものであり、この種の単行本としては恐らくわが国では最初の本格的文献であろう。笹沼氏についてはあらためて紹介するまでもなからうが、アメリカの Minnesota の故 H. Schuell 女史の門下で、約 10 年前より極めて精力的に失語症の言語治療、失語症検査法の作成、言語治療士の養成に従事されるかたわら、いくつかの貴重な失語学的研究をも発表して国際的にも活躍されており、すでにいくつかの著書（例えば「失語症言語訓練手引」八重洲リハビリ 1970 など）、訳書（H. Schuell ら「成人の失語症：診断・予後・治療」医学書院、1964、H. Goodglass ら「失語症の評価」医学書院、1975）がある。

序、目次を除き 422 頁にわたるこの大著の内容は、I．失語症とは、II．言語症状と主要症状群、III．評価と診断、IV．言語治療総論、V．言語治療の原則、VI、VII．言語治療

の実際（1）、（2）の本文（258 頁）と附録（180 頁：1．失語症鑑別診断検査手引 および 検査用紙、2．言語訓練プログラム、3．報告書の書き方例）に分かれている。「失語症の評価面に関する知識・技術に比して治療面のそれは格段に不備である。本書をまとめることを思い立ったのは、まさにこのような不備を少しでも補う必要性を痛感したからに他ならない。したがって本書では鑑別診断後に講ずべき治療過程について、出来るだけ詳細かつ具体的な情報を系統的に提供することを、その最大のねらいとした」との著者の意図を反映して、IV、V、VI、VII 章に本文全体のほとんどの頁（220 頁）がさかれており、ことに VI、VII 章は 150 頁にわたる詳細を極めた症例集（30 例近い）であって、失語症患者に治療者がコンタクトを持つようになってからその手を離れるまでの間の言語治療の過程を、心理的問題や家族指導、職業訓練上の問題をも含めて、具体的、かつ率直に——言語訓練効果の認められなかった例を含めて——記載しており、記録としても貴重であり、読みごたえがある。

さらに附録では、「これまで失語症の言語治療にたずさわる者の間では……タブー視する雰囲気があった」という言語訓練プログラムの実際を 90 頁にわたってあます所なく提示し、且つ報告書の書き方まで実例をあげて説明するという入念さである。

著者の失語型分類——かつての Minnesota 学派（1964 I, 1976 II）の 7 型に、古典論に近い Boston 学派の分類を加味・併用——、殊に古典論との照合と超皮質性失語の取扱、その他いくつかの問題については、立場によって様々な批判も可能であろうが、黎明期をすぎたわが国の失語症言語訓練の現況にあって一つの記念すべき里程標であり、本書は言語治療の現場に携わる治療者に一つの方向を示唆するのみならず、従来その必要性を痛感してはいても言語治療の具体的な状況を伺いしる機会のなかった医師、他のパラメディカルスタッフにとっても学ぶべき多くの知見を提供してくれる好著といえよう。

B 5, 頁 434, 図 60, 絵カード 443 枚,
¥8,800 円 300, 1978.

医学書院刊